



# 虚飾

Vanity

永田円了

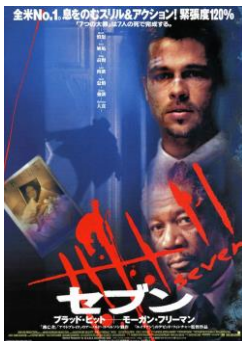
虚飾とは、他者に自己を良いように見てほしいため、うわべや体裁を整えること。周囲から自己をよく見てもらおうと無理をすること。実質を伴わない上辺だけの飾り。虚栄、見栄（みえ）ともいう。英語では、Vanity 又は Pride と表現される。人の無意識層に巧みに入り込み、エゴと結託して自由な本来の人間の生き方を蝕む。まあ、厄介な代物である。

## 七つの大罪

七つの大罪（seven deadly sins）とは、キリスト教における「七つの死に至る罪」--傲慢（pride）、強欲（greed）、嫉妬（envy）、憤怒（wrath）、色欲（lust）、暴食（gluttony）、怠惰（sloth）のことである。

罪そのものというより、人間を罪に導く可能性があると思われてきた欲望や感情のことを言う。虚飾は、この中の傲慢（pride）に属する。

欧米は“罪の文化”が基盤にあると言われる。一方日本は、“恥の文化”が人々を律している。罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行を行う、のに対し、恥の文化では、外面的強制力にもとづいて善行がなされる。恥は、他人の批評にたいする反応である（ベネディクト『菊と刀』）。



罪は内なる目（神の目）によって裁かれ、恥は外の目（世間の目）によって行動が制限されるのである。米映画『セブン』では、この七つの大罪がサスペンスとして描かれている。一見の価値あり。

## 虚飾を捨てることができるか

人間が虚飾を捨てることは、残念ながら難しい。自我（エゴ）が後押ししているからである。虚飾が無意識界から巧みに人を操り、果てには本人のみならず周りの人々をも崩壊に導く。米映画『普通の人々』(ロバート・レッドフォード監督、アカデミー賞受賞作)には、見事にこの魔物が人間関係を蝕み、最後には家庭の崩壊に至る過程が物語られている。

果たして人間はこの魔物から自由になることはできるのか。何とかなる。まず気付くことである。いま自分が虚飾に支配されているという状態を把握するのである。人間にエゴがある限り、この虚飾という魔物を排除することは不可能にしても、支配されない自分をもつことはできる。

2500 年前ブッダは苦行中、琵琶の音を聴いた。先生が生徒に教えている。「弦は貼りすぎても、緩めすぎてもいい音はでない」----- ブッダは瞬時に“中道”の意味を会得するのである。すべての物事は、多すぎてもダメ、少なすぎても用は足さない、という真理を悟った。虚飾（pride）とうまく付き合い、中道の精神で望めば、この魔物に支配されることはない。

### <事例>

映画『セブン』／虚飾（pride）が七つの大罪の1つとして描かれている  
 谷川弥一議員の記者会見／俺は長崎3区の恥だ、日本は恥の文化  
 パリコレ・コンポジ撮影／虚飾を捨てなければ、シャッターを切らない  
 美空ひばり／無意識に虚飾の世界に入る、徹子の部屋より  
 映画『7 Years In Tibet』／西洋とチベットの文化の違い、虚飾 vs 謙虚  
 映画『普通の人々』 Ordinary People／虚飾に支配された母親が家庭を蝕む  
 映画『理由なき反抗』／プライド高き父親 vs. プライドなき父親  
 映画『リトルブッダ』／6年の苦行の後に悟った“中道”  
 歌・『ナチュラル・ウーマン』／Carol King, Fergie, Mary Jane

円了のホームページ: [www.enryo.jp](http://www.enryo.jp)



『普通の人々』